



上野焼

博多織・久留米餅に包まれて...

2.14 St.Valentine's Day



のマイちよこで心温まる贈り物

上野焼協同組合の14窯元から、バレンタインチョコに掛けた「マイちよこ」が2月6日〜17日の期間限定で販売されました。口の部分がハートの形に作られた猪口ちよこもあり、かわいしい、珍しい」と女性に大人気。甘い物が苦手な人への贈り物としても好評でした。

また、上野焼と並び、国の伝統的工芸品に指定されている博多織・久留米餅がすりと連携した「マイちよこセット」も売り出されました。好みの猪口と博多織・久留米餅のきんちやく袋を選んで組み合わせるこのセットは、陶芸館では予想以上の売れ行きから追加注文され、計80セットがわずか4日間で完売。上野焼史上初の試みでしたが、伝統工芸の相乗効果による新たな魅力が、四百年を超す歴史のページに刻まれました。



町長日誌

一先只、中学生時代の同級生が訪ねて来た。彼は、高校卒業後、東京にある青果市場に就職をし、この3月末で定年退職を迎えることになっている。42年前、まだ寒さの残る直方駅で、上京する列車を見送ったのが、つい昨日のことのように思えてならない。「始まりがあれば、終わりがある」とは言え、長い間心血を注いできた職場を後にするということは、人生の大きな節目であることに異論をばさむ人はいないだろう。それは、ある種の達成感を覚えると同時に、表しようのない寂しさを味わうということであるかも知れない。しかし、見方を変えれば、新たな出発ということでもある。いわゆる「団塊の世代」と呼ばれている人達が、我が国の経済成長を支え、世界における日本の地位を確かなものにしてきたことは誰かが認めるところである。そのことを理解したうえで、彼らにもう働き期待したいと思っている。職場という組織の枠がはずされ、自由な時間を持って地域社会に戻ってくる頼もしい力。現代社会で、希薄になつたとされている地域のつながりが、色濃く残っていた昭和30年代に、彼らは少年時代を過ごしている。その貴重な経験を、これから大いに活かしてほしいと思つた。今までとは違う自分探しの旅が、身近なところでしかも、まわりの人に喜ばれる形で始めることができるのではないか。行政も、そのためのお手伝いを、積極的に進めていかなければならない。今後のまちづくりのキーワードは、**団塊の世代であると思つていくから**。

浦田 弘二